

## このひと

日本分析化学会会長に就任される

内山 一美 氏

(Katsumi UCHIYAMA  
首都大学東京都市環境科学研究科教授)

1956年11月27日生。1980年星薬科大学大学院修士課程修了。1987年薬学博士(星薬科大学。論博)。1995年4月東京都立大学工学部助教授, 1997年ニューヨーク市立大学Mt Sinai 医科大学 Visiting Scholar。2005年首都大学東京都市環境科学研究科教授。1987年第3回大谷賞。2000年, 2006年分析化学論文賞, 2014年日本化学会化学教育賞。Journal of Pharmaceutical Analysis, Editorial Board。2000年日本化学会化学教育協議会関東支部議長。2005年日本化学会化学教育協議会化学だいきクラブ小委員会委員長(～2012)。1992年日本分析化学会ぶんせき編集委員(1994年)。2000年日露分析化学シンポジウム Secretary general, 2001年 ASIANALYSIS Treasurer。ICAS2011 実行委員(公開講座担当), 日本分析化学会副会長(2013～2014, 2016～2017), 関東支部副支部長(2017～2018)。

平成が終わり, 新たな年号で新年度を迎えるこの年に, 首都大学東京の内山一美教授が日本分析化学会会長に就任されました。心からのお祝いを申し上げるとともに, やや遠目からではありますが, 先生のご紹介をさせていただきます。

内山先生と私のおつき合いは, 名古屋大学の北川邦行先生と当時豊橋科学技術大学におられた加藤正直先生が中部支部主催で行っていた, 分析データ処理のためのパソコン講習会を関東支部でも開催することになり, 当時私が関東支部常任幹事であったことから, この企画を関東支部に持ち込んだことにはじまります。その折, 内山先生には講師として講義と基盤作成の実習を担当していただきましたが, 電子回路に非常に詳しく, かつ回路実習指導の際の手際も見事で, 失礼に当たることを顧みずに申し上げると, 私がかつていた薬学の先生というイメージからはかなりかけ離れていたことを思い出します。お互いにまだ30代であったので, もう30年ほども昔のことになります。内山先生は略歴に記載されているように, 星薬科大学のご出身ですが, 40歳になられる年に保母敏行先生が主宰されておられた東京都立大学工学部の分析化学研究室に助教授として着任されました。保母先生はご存知の通りガスクロマトグラフィー研究の大家として知られており, 内山先生が都立大工学部に転任されたときには, 一見内山先生との接点を見いだしにくく感じた方も多かったのではないかと思います。しかし, 以前から内山先生の「工学技術者」ともいうべき側面をたびたび拝見していた私は, 保母先生の慧眼に敬服するとともに, 内山先生の鮮やかな転身を驚きつつも違和感なく受け止めたことを記憶しています。

その後内山先生は, 東京都立大学が首都大学東京と名称を変えたその年に教授に昇任され, 以来今日に至るま



で期待にたがわず, 薬学と工学の二つの領域で培った経験と知識から生まれる多様かつ斬新なアイデアに基づいた研究を展開されてきました。印字技術としてよく知られているインクジェットを, 単分散機能性微粒子の生成や, 質量分析計, ガスクロマトグラフィー, キャピラリー電気泳動などの分析装置へのピコリットルからナノリットルという微小試料溶液の導入に利用する技術開発, および液体の微小流れを利用した位置選択的表面化学修飾のためのマイクロ化学ペンの創案は, まさに内山先生の面目躍如ともいえる研究成果といえるでしょう。これらの技術は, バイオマーカーアッセイや臨床診断など, 先生の原点である薬学および医学分野での広範な応用範囲をもっています。

研究室での先生は, 学生全員と毎朝10時に顔合わせをし, 定期的の実験ノートをチェックしたり, グループごとにディスカッションを行うなど, きめ細かい指導をされているとのこと。学内では学部長補佐の要職につき, 学会では副会長や有機微量分析研究懇談会委員長を務められているほか, 日中韓分析化学会議(CJK symposium)の日本側代表を毎年担当されるなど多忙な中にありながら, きちんと足元の研究室を大事にしておられる姿勢は, 日頃あまりそのような優しさを表には出しませんが, 先生の人となりを表しているように思えます。多数の優秀な留学生を中国から受け入れるとともに, 清華大学をはじめとする多くの大学と共同研究を展開し, 頻繁に講演に招かれていることは, 国際的にも先生のお人柄が好感を持って受け入れられていることを示しています。

最近, 内山先生はランニングに目覚めたとのことで, ストイックなまでに体を絞り込んでおられます。周辺の学会と同様, 決して安閑としてはおられない状況に置かれている本学会ですが, 適度な運動を続けられて健康を維持し, 力強くけん引していただくことを期待したいと思います。個人的には, 本当のめり込める研究テーマに巡り合ったとおっしゃられているナノワイヤのご研究に割く時間もキープされることを願いつつ。

[埼玉大学大学院理工学研究科 渋川雅美]

## 会長就任にあたって

内 山 一 美

この度、2019年度～2020年度日本分析化学会会長に選出されました。会員の皆様、理事会構成員の皆様、事務局の皆様どうぞよろしくお願いいたします。

いうまでもなく、分析化学は科学研究にはなくてはならないものであり、環境・理学・工学・医学・薬学・農学をはじめ産業・技術開発など幅広い研究分野の基礎となるものです。化学研究に費やす時間の大部分は、対象の組成や性質のキャラクタリゼーションなどの分析であるといっても良いでしょう。新たな方法が見つかることで科学研究が飛躍的に進歩していることは歴史が裏付けています。

分析化学に対する社会の隠然とした期待は非常に大きいにもかかわらず、本会の会員数の減少傾向に歯止めがかかっていません。これは本会に限ったことでなく、日本化学会をはじめとする多くの大規模学会に共通することではあります。会員数が継続的に減少した結果、学会運営の最も大きな資源である会費収入は年々縮小しています。本会は一時期危機的な財務状況になりましたが、歴代会長・理事の方々の様々なアイデアとご努力によりなんとか乗り切ってきました。現在は当時よりも改善されたとはいえ、余裕を持って運営していくだけの余力はなく常に改革・改善が必要な状態です。

本会会員へのサービスの最も基本的なことは、分析化学会に入っていて良かったと思っただけのような魅力ある企画や充実した内容です。このために様々な取り組みが行われてきました。私自身が寺前会長時代から携わってきたものや現在取り組まれているものの中で重要なものとして以下があげられます。

まず産業界の方々の積極的な参加の場の提供です。産業界会員は正会員のうちの約半数を占めていますが、発表の場、活躍できる場が十分とは言えませんでした。寺前会長のときに産業界シンポジウムを本部企画として立ち上げ、積極的に会の運営に参画していただき、シンポジウム、若手との交流・情報交換を行っています。大学院生のキャリアパスの具体的なイメージを与える機会ともなり、若手の研究者の応援にもなります。更に今年度の関東支部主催の分析化学会年会では講演分類の見直しも行っており、産業界の方がより発表・聴講しやすい分類としています。今後さらに充実したものにしたいと思います。

分析化学会では国際会議としてICAS及びASIANALYSISを開催してきましたが、2014年の第63年会からアジア分析化学シンポジウムを本部企画として立ち上げ、アジア地域との連携を進めています。更に2016年度からはChina-Japan-Korea Symposium on Analytical Chemistryも本会として進めており、本会のプレゼンスの維持・向上と相互交流を積極的に進めています。またAnalytical Sciences誌は鈴木会長時代から科学研究費による補助を受け、小澤委員長のもと分析化学の本格的な国際誌・アジアの基幹ジャーナルを目指し

ています。そのためにはIFの向上が必要です。2021年には馬場組織委員長のもとICAS2021が開催されますが、ここ2年間は準備期間として重要な時期に当たります。

和文論文誌の分析化学については岡田会長の命により電子化が達成され、実質的な隔月化も達成されます。日本語で読める本格的な分析化学の学術誌としての役割を確固たるものにしていきます。

上記のようにこれまでの歴代会長、特に岡田会長が取り組まれてきた会の運営・改革方針を引き継ぎ、会員の皆様にメリットを感じていただけるような学会にしたいと考えています。また財務については、会費収入の多くの部分を人件費に当てている現状の改革に引き続き取り組みます。限りある人的資源を有効に活用するため、事業の見直しや取捨選択、場合によっては外部委託などの方策を通じて学会運営のさらなる効率化・スリム化が必要です。

我が国は人口減少と超高齢化社会が到来します。残念ながら我が国の若年層の人口が今後増加に転ずる見込みはほとんどなく、すでに高齢化社会がスタートしています。このようなことは他の先進諸国でも将来起こることで、ある意味では世界中が日本の今後に注目しています。

分析化学会は創立以来65年以上の歴史をもつ伝統ある学会であります。日本社会の現状と将来を考えると、従前どおり漫然と学会を続けて行けるとは思えません。従来とは異なった考え方、それに基づく学会のあり方・運営方法の模索が必要と思います。また情報通信網やAI技術の普及によりこれまでよりも容易かつ高速に、情報・人的交流がより便利に行えるようになります。これによる需給バランスの高速化により“一物一価”化が急速に達成されます。このような社会は間近で、すでにショールーミング現象によるトイザラスや老舗ホテルの倒産が起こり、また将来のAI社会を見越してgoogleは数学博士の買い占めをしています。AI化は既存の多くの仕事を奪うことにもなりましょう。ITやAIでは代替できない人材の育成も急務です。

アジア諸国をはじめとする新興諸国が科学技術でも台頭し、我が国のプレゼンスは徐々に低下しています。またトランプ大統領の誕生、英国のEUからの離脱問題、中国の一帶一路政策に見られるように世界の多極化が進んでいるようにも思えます。そのような中で我が国の科学技術の根幹をなす分析化学会がその活力を維持し、輝き続ける学会であるためには大胆な取り組み、未来を見据えた価値の創造とそのための中核的構築が必要になると思います。また、基幹学会から教育行政に情報発信を行えるような仕組みの整備も必要になりましょう。

上記のような観点から私にできることは限られているかもしれませんが、できる限りのことをしたいと思います。会員の皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。